



074353-000-8

特64-371

征清もろこし談語

鶯亭 金升 / 著

M27

CEI-1578



特
3

162
1053

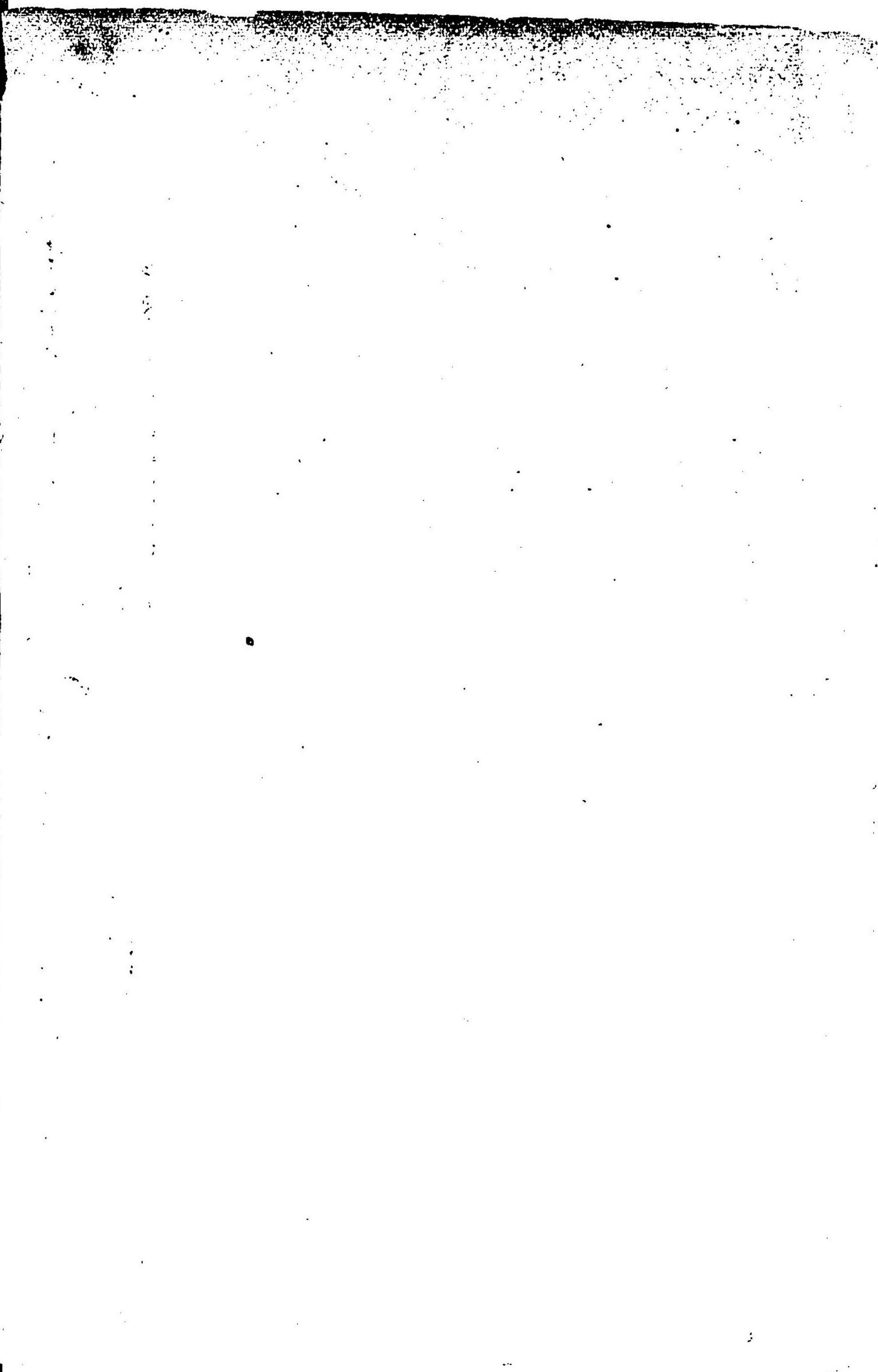
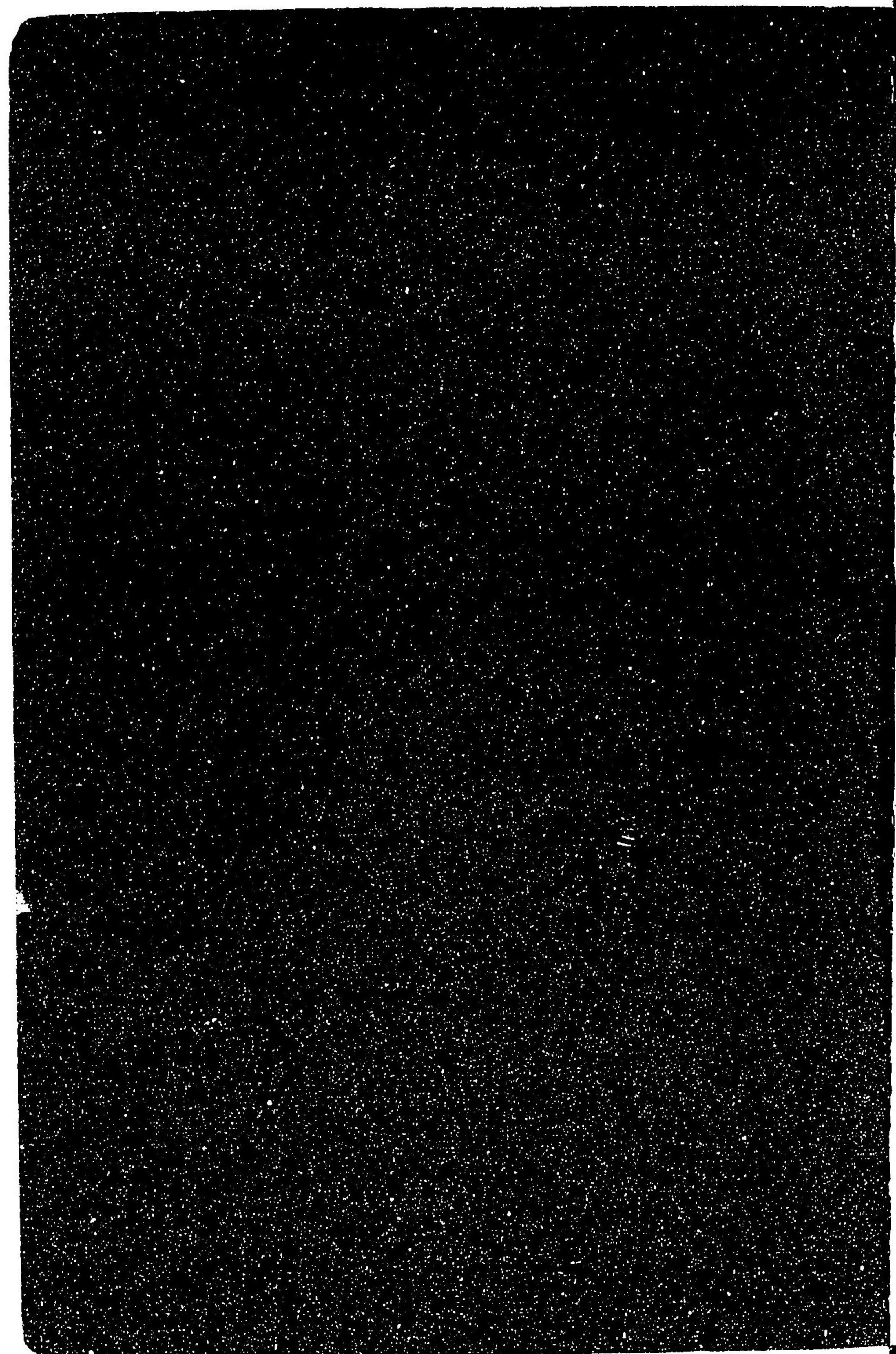
芳亭主人新美

元
法
語

鳳林館藏



特
3



○之圖件

お前をんおは

様をお品まん

喧嘩がお好で

豚尾キビノビ

武士・騎虫大威

張朝鮮戦國

お邪魔さまほけ

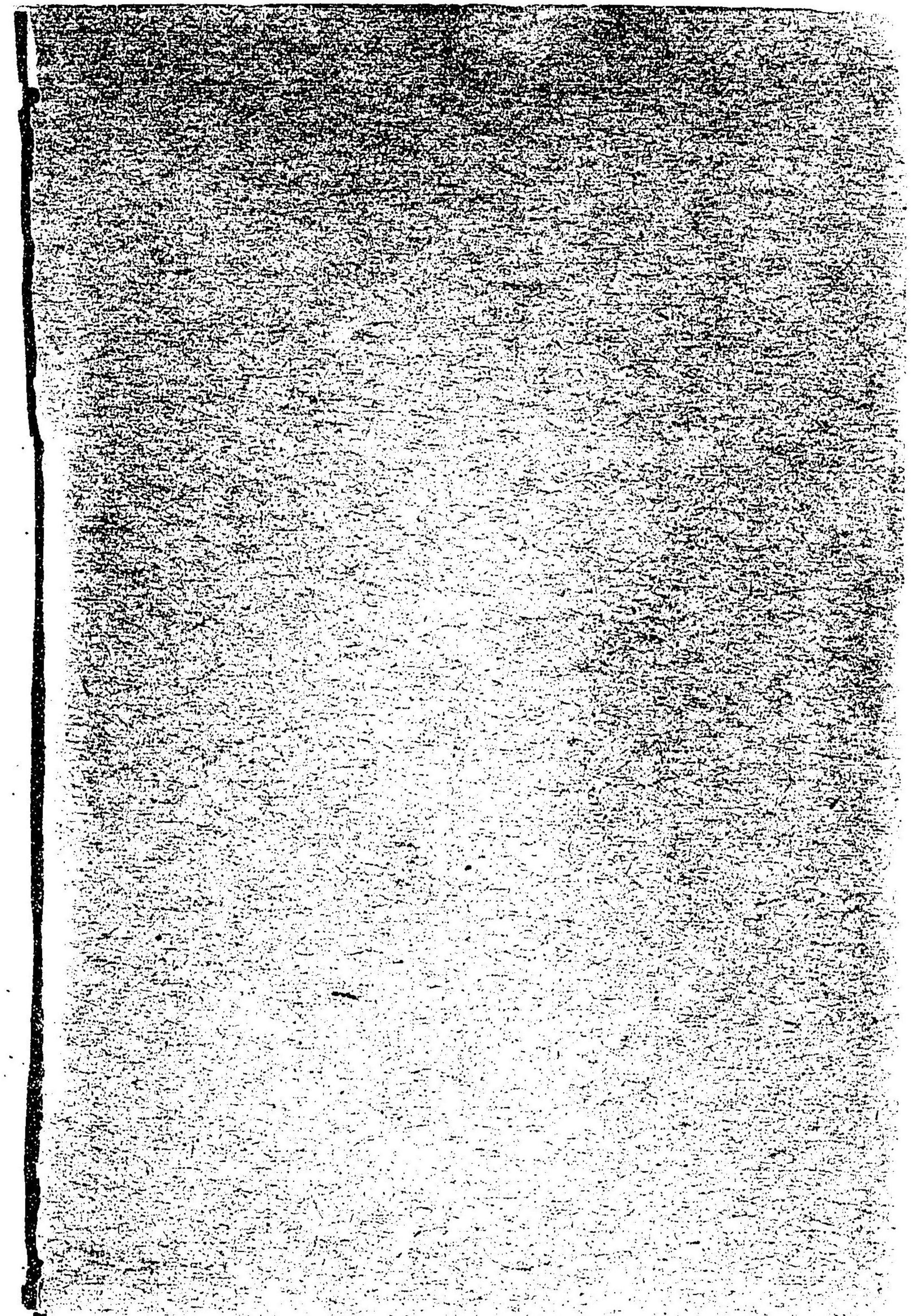
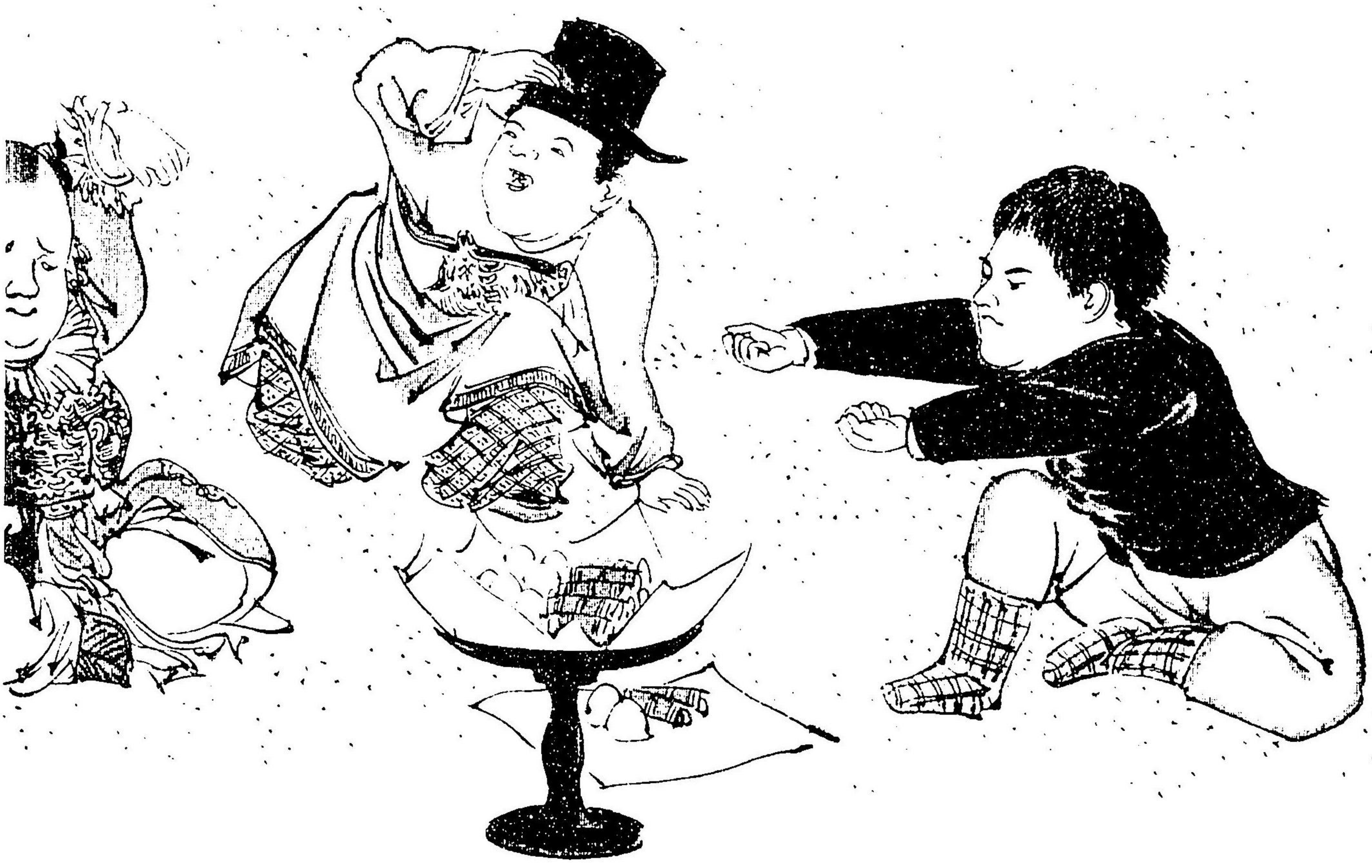
お出のゆる清國

勢此方アヨ

勝たさうだが

鼻をなぞり

北東へうつ



○と國件

お前をんお純

様をお品まらん

喧嘩がお好び

豚尻キビノヒ

武士に騎出大威

張朝鮮戦國

お邪魔さま海け

不出けゆる清國

勢此方アヨ

勝たさうだが

鼻をなぞく

北京へうつて

一戦よ



序

もろこし團子とは如何なる團子か、宇津の山邊
 の十團子の如き風流なものにもあらず、隅田川
 原の言問團子の如き手奇麗なものにもあらず、
 から紅ひの紅餡にて殺伐なるも、滑稽なるも出
 たらめに搗き交て、わづか日曜一日に捏ちあけ
 たる即席手製、是は新製もろこし團子ト味噌を
 あける程には無れど、秋の夜永の茶受の菓子と
 共に坐右に置き玉ひて、御覽あればお慰さみ拵
 らへ人も一日のお慰さみ、急案と云ふ結構な餡

序

一

をべツたり塗りつけたれば素敵に甘ひ田舎館、
 虫歯にさはらず疔癢の虫も起らずうまいと云
 てもうまく無いと云ても、つまりお笑ひの種な
 れは書き出しの一丁より永當々々、お讀み取り
 の程を序文の紙の一重に願ふト、引札めき口
 上が序に御座り升急案じやく

時雨月或雨降の日曜一日鳳林館の樓上に籠城して凱旋と云ふ銘
 ある安筆押取り

鶯亭金升

しるす

◎目次

一 三國拳……………一丁

一 朝貌日記宿屋の段……………四丁

一 大津書ぶし……………六丁

一 支那の軍歌……………八丁

一 俳句……………十二丁

一 長明勸進帳……………十三丁

一 全京鹿子娘道成寺……………十七丁

一 三下り種々……………十九丁

目次

目次

一 清元梅の春……………二十三丁

一 近頃河原達引……………二十四丁

一 忍寄孝に事寄……………二十六丁

一 謎かけ種々……………二十七丁

一 一口ばなし……………二十九丁

一 落しばなし……………三十丁

一 狂句種々……………三十三丁

一 都々一三十六歌戦……………三十五丁

一 三題はなし……………七十二丁

一 海。口。大砲……………七十二丁

一 孔明。正成。藁……………七十三丁

一 錠。北京。敗走……………七十五丁

一 葉唄見立……………七十七丁

一 いろは短歌見立……………八十五丁

一 出たらめ問答……………九十丁

一 洒落……………九十三丁

一 冠り附……………九十五丁

一 ものゝ……………九十六丁

一 變調……………九十七丁

一 羽織かくして……………九十七丁

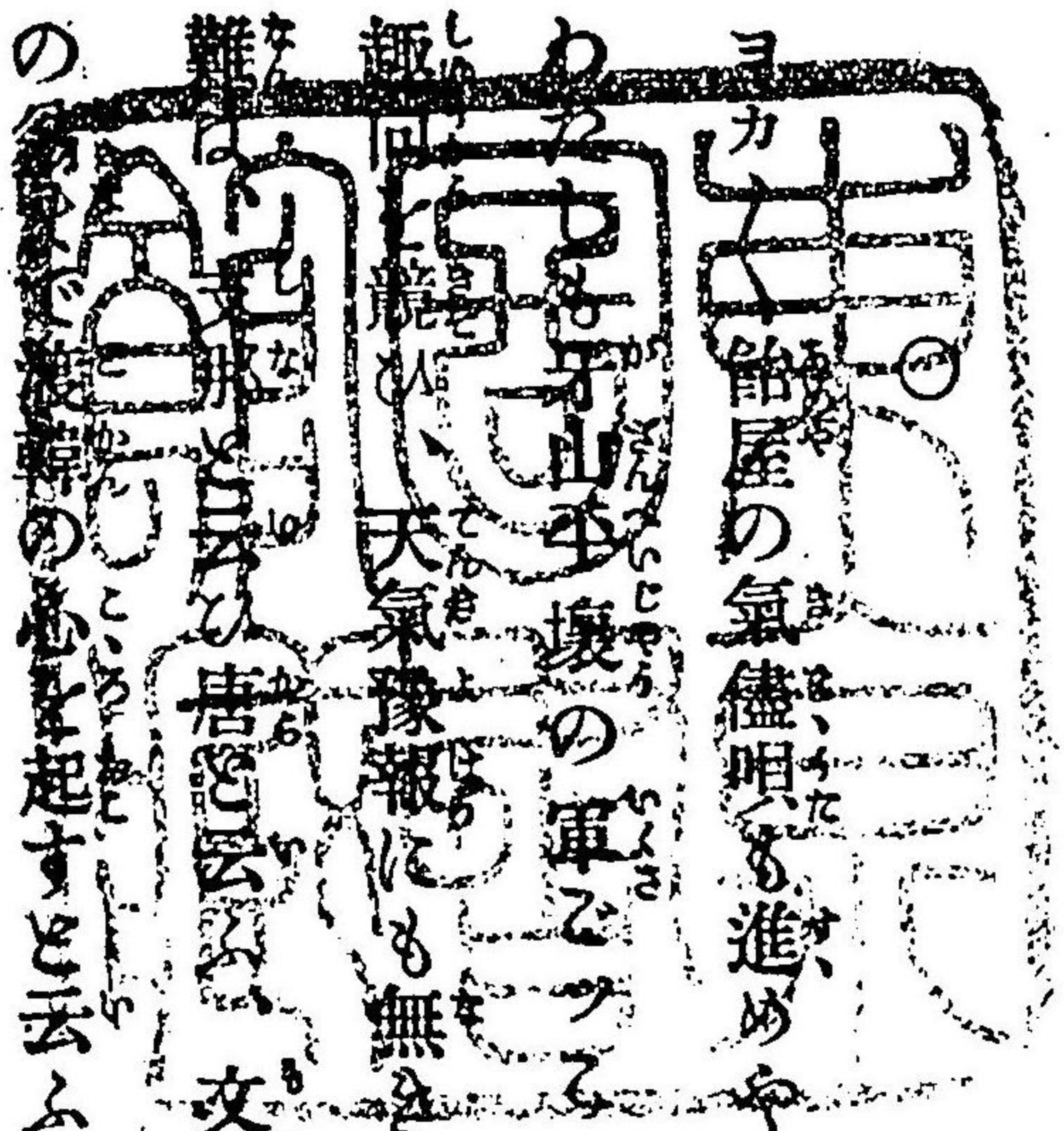
目次

- 一 ひとつとして……………九十八丁
- 一 起て見つ……………九十八丁
- 一 露の尾花……………九十八丁
- 一 棚の達摩……………九十九丁
- 一 活惚れ……………九十九丁
- 一 御祝儀老松……………百丁

以上

征清し もろこし談話

東都 鶯亭金升戯作



ヨカク、館屋の氣儘も進めや進めの軍歌と成り、ジャンケンポンの鬼
 りつ、山平康の軍とつとと變り果、芝居錦畫何でも彼でも勇し
 難、天氣豫報にも無き清學指南所の礫の雨、降りかゝつたる災
 の、唐と云、文字さへ憎む大和魂、三つ子の魂、有難き世の
 光景や、面白き世の光景や。茲に所は何方なりけん「御主人御在宿か子

もろこし談話

一騎當千の剛者が駒下駄の足掻きを揃へて是まで出陣くト大聲を揚た
 は大勝の咳呵。外仙。ト云ふ三人連。主人の笛外ツ、と立ち出「ヨウ是
 へく一騎當百のお揃ひとは難有いな。大「何とでも云ふがい、今日は何
 時の舌戦とは事變り些時事を談じる積りだ。咳「實に時事で丸めて朝日で
 こねてト云ふ喜撰ならお茶請の来る迄新聞でも見て材料を呑み込む事だ
 外「材料を呑み込んだら雪隠の近い處へ陣を取るがい、咳「チヨツくだら
 無い事を宣ふぞ。外「イヤサ瀉る事を云ふのだヨ。主「是サ少し黙止て呉れ
 君達の唾が水雷も宜しくだ。大「咳呵子の口なざア少し魚形と云て然る可
 しだからネ。主「オヤ外仙君は茶箆筒を明て何を探すんだ。外「火鉢の抽斗
 に一つ残つた煎餅の枚を含み乍ら鳥渡菓子鉢を襲ふと云ふ軍器。大「何の

疾に此方から斥候が押し出した。主「イヤ何にしても嬉しいヨ三人「何が主
 「何がッて常は能樂ついて居た我々もいざと云ふ時には尙武の念を起し
 て一寸云ふ口調までも軍体だ。咳「此軍体は表でも嫌ひは有りやせんヨ大
 「僕などは去五月堀切以來菖蒲の念を起し通して居らア外「黙れく主「其
 處でサ。外「饒舌れく。主「八釜しいナ、マア聞給へ。大「聞よ。主「平素と
 違つてズツと雄心勃勃々たる作が有るのだ。大「妙な處へ勃々を附けたもの
 だ。主「或ひは變調或は落しはなし。外「都合二通りあつて定價はいつもの
 通り。主「扣へろ。外「ハツ。大「シテ其御作は。主「然候ふ金玉均の暗殺よ
 り平壤黄海の大捷まで即席即吟。悉く名作。咳「何しろ効能書ばかり承ま
 はつて居た日には果しが附きやせんドレ。一見願ひやせうか。外「願ひやせ

う 咳「オヤ君かへ 外「藤八なるもので 咳「イヤ拳ぢやア有りやせん御主人のお作と云ふのを見 外「此奴の飛だ拳違ひをした。大將是かへ主爾うサ 外「何だか大分有るやうだ 太「ドレ〜 咳「拙が一つ披講致しやせうオホン〜 オヤ〜 朝顔日記の宿屋と来やした

○泣顔日記

佐世保宿屋の段

泣き言はなしも時の一興話して聞せ何とく
 「ハイ〜 宜う問ふて下さり升お言葉にすが
 りお明し申すも耻かしながら元豚尾は中國
 生れ賄賂出して兵士の身上此年不時の鹿島

立に困り果たる國人とためらふ間さへ夏の
 夜の短い命と知らない別れこゝろ急るゝ旅路
 さへ思ふに任せぬ國の弱み「あやふやに誘な
 はれ支那の空をあとにして海を越したる憂
 き思ひ敵勢遅しの伏兵にやま〜 兵は有り
 ながら甲斐なき小筒に打ちかけられ海へ逃
 れば敵方の傍へも寄れぬ砲丸づくめ避る眞
 中を打れじと舳先を向けて數〜の味方を
 見捨漕ぐ船に遁れて聞けば陸兵もあしたの
 芥子と散るかなしさ旗も火薬も思ひすて何

處でめぐり大砲の烟りをあとに遠路や身の
 痛みさへ應へなく怖しく〜に氣を揉みちら
 し程も無いのに生捕りの中にさまよふ口惜
 さは何時の世いかなる報るにて重ね〜の
 不覺の數〜あはれみ給へとパア〜の聲
 を放ちて嘆きける扱〜白痴た話何國も開
 けて居る世界にエ、氣の弱い男たナア

(國々珍聞)

外「ナニ〜是からあとは大津藩かハテ附會が出るワ〜」

○大つよ武士

「暗の夜に成歡近く勇んで繰り出す日本兵黒
 けふり、飛び出す鐵砲丸大筒小筒を打ちつゞ
 け、支那兵營ではらんちき騒ぎ、大將軍は深く
 隠れて呆れ顔、中にも負癖ついた弱虫唐人は、
 首を抱えて、豚の尻尾クル〜捲いて、浮雲い
 く、險呑たいト、牙山もすて、備へし大砲、み
 なく〜置いて歸り行く。(全)

咳「此奴は何うもひどうゲス大分糸に乗ぬ處が見える様だ 外「銅羅や鐵盥
 にさへ乗ぬ聲で糸が呆れる 大「軍歌があるせ 外「退屈序に聞て仕舞はう、
 ドレ〜」

國の耻辱になるとても、

いのち有ての物たねぞ、
日本の兵と見たならば、

尻尾をまいて逃る可し。
たとへ大勢居たところが、

己惚れ起しいくさすな、
いよく迫るその時は、

鐵砲投げてくたる可し。
降れや〜われがちに、

うたれぬうちに降る可し。

斥候の兵に出逢ふても、

手出をなさば討るゝぞ、

帷幕にありて花あはせ、

夫のみ勝をはかる可し。

渾家の寫眞とお手當の、

金をしつかり肌につけ、

兵糧ばかりウンと喰ひ、

いざと云たら走る可し。

走れや〜われがちに、

怪我せぬかたに走る可し、

大つよ武士

味方の首をひろひ取り、

あたまを剃て敵軍の、

間者の坊主を斬たりと、

誇りて褒美を貰ふ可し。

自國の弱いたびゞとを、

怖して路用うばひ取り、

是も間者といつはりて、

二重に金をねたる可し。

ねたれや／＼われがちに、

手當り任せに貯蓄る可し。

日本の兵はみなつよし、

日本の海はみなあらし、

防ぐに難くせむるにも、

所詮行ぬとあきらめよ。

金どいのちが有ならば、

女を連れてこつそつりと、

老せず死ぬくにたづね、

船をぬすみて渡る可し。

渡れや／＼われがちに、

あとさきみづに渡る可し。

大つよ武士

十一

外これ是なんは何だ 圭しハテ知れた事支那の軍歌だア 外これハ、ア夫おれぢやア清軍歌
だ 咳ちよつちよつ鳥渡拙めいせんの名吟なを御聞おきき下くだせへ 大おオヤ何かまた出でた 咳か斯かうでゲ
ス

神風かみかぜやたゞさへ散ちるに芥子けしの花はな。サ

「いゝでゲセウ大おでゲセウヨ。勝手かつてにするが宜ようゲス 咳か最もう一つお聞き
に入れやせう

平壤へいじやうの捷報しやうほう (ト云ふので)

海うみまでもこの勢いきはひよ落おし水みづ

果はたして海軍かいぐんの捷報しやうほうがついて来きやした 外これいゝサ〜君きみは天眼通てんがんつうだヨ圭
「何か云いふ度たびに後あとへ反かへり返かへるから癩疔通てんかんつうといふのだ大お一泡吹ひとあはせられたナ

咳か何なんの交まじツ返かへしに驚おどろくものか又また有ありやすヨ

落おし水みづ四百餘洲よししうへひゞきけり

最もう一つ新あたらしいのを御覽ごらんに入れやせう是これは新橋しんばしへ浮屠いけぼりの着つた時見物ときけんぶつして
出で来たもので

狩かりし日の樂たのしみ嘸さそな 土産茸つとせきのこ

トハ如何いか 圭し東西長唄とうざいながうたの勸進帳かんじんちやうを一つお聞きに入れるから謹つしんで聽聞ちやうもんあれ
三人さんにん心得こころえ申まをして候まをふ

○北京ぺきんを落おして 安心帳あんしんちやう (目出度城めでたくしろを抜ぬく文句もんく)

つひに勝かたぬ清兵しんべいも一度いちどの破やぶれぞ至し當やうなる惣むす

軍北京を切り拂ひ次第に消えし豚仲間うろ
 つく方は國の果或時は海に沈み雷火に身を
 碎き又ある時は陸兵の後へも退ぬ烟の先に
 雨あられなす砲撃の寄せ来る敵や隙間あら
 じ不覺つゞきの當もなく怖ろしやとち
 ぎれかよりしから錦繡に劣れる姿なりと
 く降参互ひに顔も蒼ざめていさ駈け給へ
 の尻からけ。
 實にく唐も衰へたり敵の情の對遇を受け
 て其日を送るとかや支那は他國の笑ひ草み

な駈出しの若豚尾一度交へし戦から次第に
 負の數超へていよく此處に持ち兼るとゞ
 めの太刀のやるせ無やア、譽められぬこそ
 時世なれ
 面白や山程にく切り首をならべては淋漓
 ながるゝ敵兵の血染め榮ある太刀振りてい
 ざや舞をまはふよもとより日兵は千當の勇
 猛ツイ半年の勝の沙汰是なる支那兵の首を
 團子につくりあけ刺すは竹の串く捕るは
 金の箱日を経るとも絶ずとつたりとしく

勝つや勝祝ひのこゝろゆるして酒宴の人々
 手柄ものして然ばよとて銃を押し取り肩にか
 け唐の王連れ捕虜等の辨髪を掴みたる心地
 よく神の國へぞ歸りける。

大「安心帳御自慢の上は味噌に疑ひある可らず然りながら言の序に問ひ
 申さん世に變唄句集さまゝゝある中に變唄は歌はるゝものにして此歌系
 にはむづかしけれ夫ども地口なるや如何に 圭「ホ、其由来いと可笑し夫
 主人の稿といつば毎度緊要の用事をすて置きッ 外「あらむづかしや面倒
 無益。端折つて茶でも入れ無へか 咳規則に欠けたる手似葉は如何に圭
 「夫不時の急案にして五十音よりのひいさを取て是を片附く大「ひいかぬ

假名は 圭「文字出たらめに書きし筋立 大「讀に通はぬ文句はいかに圭「日
 曜即席の駄洒落と存ず 大「扱また地口の出来ぬ字は 圭「元唄の調子を知
 る乘なり 大「歌へる文字の 圭「多分は無し 咳何の事だ夫ぢやア根ッか
 ら變唄になりやせん 外「四號馬鹿にした 圭「金剛杖を押し取てさんゝに
 攻撃されちやアいよゝゝ外行きを出させはなるまい 大「今度は何だ圭「京
 鹿子娘道成寺だ。オイ兩君二人「聞たぞゝ

「唐に弱みは數く御座る陸の勝を聞く時は
 死傷無數とひゞくなり海の勝を聞く時は破
 損滅法と聞ゆなり清將の弱さは生得實事追
 ひくゝに寂滅致すとひゞくなり聞て驚ろく

意氣地なし。唐の榮耀の夢さめて。今度の秋や
 嘆き明さん。怯すおくれぬ我兵士。うたれし傷
 のいたむのも構はぬは。只はやり男の何うで
 も日本は勝じやもの。すゝめくと呼はれば
 應と互ひに先駈けに命さへナニ行けく。と
 何うでも兵士は剛の者支那の奴等は白痴な
 ものじやへ。金に眼がくれ猫も杓子も錢取り
 主義でいざと云ふ時やソレ逃ろ。スタコラくてんく
 ぐく金といのちが有ればくらせる氣で出る
 兵士。いくさする身で逃て褒美を取ウるとサ。

平壤あたりの樹木がくれに。甲は東へ乙は南
 に迷ひ入りつゝ。走りながらも賊の遣逃げ。夫
 が實の事じやへ。チーフウ占領。北京落城。支那
 の天子も共に其身を。走り隠れて。耻はしらす
 に。只助かれと。弱いころが實ぢやアへ。

嗚アツア情ない程出来が悪う。ゲスナ清國の兵と同様で出れば出る程の
 ものに碌なのが有りやせん。外よしサく。咳呵子の俳句も随分碌なもの
 だヨ。まゝ人のものをけなす癖に其方のお作はまだ一つも承まはらないナ
 本サアく出来たゾく。此方はズット粹に三下りだ。まゝコリヤア手短
 で宜らう

「小くとも、膽は大きな我國の、今度打ち入る兵卒は、みんな強いぢやないかいな。」
 「廣くとも、狭きこゝろの支那の國、出ると負けるとは、當り前、たかゞあらしの木葉武者。」
 「威張るとて、口ではばかりの手前味噌、面とむかへば、逃支度、扱も笑支那、意氣地無し。」
 「威海衛、澤山ならべた大砲も、丸があたらにや無いがまし、みんな九段のさらしもの。」
 「太刀風に、もろく切れる豚尾兵、國をからとはよく附けた、實に豆腐の様な人、」

「ちりぐに、逃るばかりで負軍、どゞのつまりは地の下の、遠いところへ逃のびる。」
 「しづめられ、船をはなれし支那兵は、龍の都へ落て行く、實に愉快な水雷火。」
 「黄海は、ふかきもので、何時となく、水が減るとは、其筈よ、澤山慈姑がしづむ故。」
 「新橋へ、着てうれしい生捕りは、一人ぐに青い貌、生た西瓜ぢや無いかいな。」
 「勝いくさ、何處も朝日の旗ばかり、あたまた尾ある化物は、何時の間にか、消失る。」

「賈いくさ支那のみやこは大騒ぎ風にもこゝろ置く露のみんながワイく泣き出す。

「長城も役に立たない人少なみな散りくとなる鐘もあはれ彌ます支那の秋。

「勇があるおまけに義ある日本兵婦人小兒はいたはりてむかふ所はみな靡く。

「色と欲二つ備へしチヤイニース耻も情もあるらばこそ退治されるは天の罰。

外待く爾う出たらめを聞せるなら此方にも量見があるぞ 寺何う云ふ量見が有るのだ 外斯う云ふ名作をやらかした 寺ハ、ア梅の春と來

たナ

「から錦さめて野山の秋風蕭々、(大)此奴は素敵に堅

いッ清元梅春の變調と云ふがい、寺(東西)「いつか北京へ

朝駈けの彼も是もと撰み討ちいざ首とらん

李鴻章手筈宵から談じ置きちから攻めする

せり合によい敵兵を粉微塵天津濟で陣押し

の旗のあさひのいさぎよく此地ばかりを眼

にかけて、今日開戦と言ふなら腕をかぎり

城攻めと各自にかたき意氣込はほんに鬼と

も組むばかり時は今ぞと砲けふり消る真中

を突貫ふて、難なく勝を得たりけり、

主「千秋樂には民をなで萬歳樂には支那地を取るカ、大國のにぎはひ忽ち弓矢とる身も時を得て目出度こゝに討平げつさせぬ光り日の本と榮え時めく旭影幾度の勝や祝ふらん千歳の春やうたふらん、外爾先廻りをされては困る、主「平壤の清兵ぢやア有るまいし廻られて困るの何だのト妙な愚痴だア、大時にまだデンクが出んぐだから一つ遣う、主前に朝貌日記があるせ、大「ハア爾うか併し即席新作今のお言葉の支那兵の妙な愚痴と云ふ奴を御覽に入やう」

○弱よほい 近頃變ぬ頁辭
清兵しんべい

「ソリヤ聞えませぬ清帝さま、お叱り無理とは思はねど、什麼雇はれる初めより、金で兵士になりすまし、演習もせず、にやみ試合、何の軍議も内々は、筒かたけても打ばせず、ほんのお役と思ふもの、大事のく女房の留守居、すき間があれば逃げる氣で、いくさが勝になるものか、不忠とも弱蟲とも、わるい噂も、ユレ申し、言はずに褒美を下さんせト、盗みし官金押し隠す、外「さしかかりまして常警津を一つ、主「關の戸か猿曳か、外「イヤ嵯峨や小室ト新しく出掛けやう」

○想寄兵言傳

陸や海路の惣がより勇氣の兵は皆すゝむ車
 や馬に積み乗せて今日討ち取りし豚尾兵ソ
 レ覺へてか君達の渡韓も秋の中秋過ぎおほ
 ろけならぬ其武威を見とめて譽めて數く
 のはれの城攻め手柄は腕に充滿たりと云ふ
 事は出立折知て明くれに多くの願が今日の
 今届いてうれしい勝いくさ、在り丈殺して下
 さんせ、ヤイノくと取りくゝに悦ぶ顔の晴
 勝負

圭「ヤレ〜御苦勞千万、處で變調も飽きたから謎と行う 大「イヤハヤ種
 々なものが出るぞ 咳「御主人拙が一つ題を出しやせう宜うガスカ 外「宜
 うガスヨ 外「宜うガスヨ。さつさと出すがい、咳「エ、とマア斯うでゲ、
 ス。支那とかけて 圭「支那とかけて 咳「エ、箸と解く 圭「心は 咳「何う
 しても二本の物だ 圭「日本とかける 外「フウ日本とかけて 圭「湯嶋の坂
 下 外「心は 圭「ゑらい兵(屏)だ 咳「支那兵と行やせう 圭「支那兵とかけ
 て 咳「溫柔い人が異見を聞くト解きヤス 圭「ハテナ 外「心は 咳「ハイ左
 様(敗走)〜 圭「何の事だ餘りつまらぬ 外「日本兵だ 圭「日本兵 外「的
 の無いあづちの前で弓を牽く 圭「妙だナ。心は 外「向ふところわたるも
 の無し 大「笹棒な 圭「海軍だ〜 外「日本の海軍とかけて 圭「此の間の

地震と解く、外「オヤ今度はね隣でね解き下された。心は、圭「水兵何うも
 (垂平動も)つよい、咳「イヤモ附會」。北京城と行きヤス、圭「北京城咳
 「鮎と解く圭「心は、咳「秋の末に落るッ、圭「人の事を言て御自分もフン秋
 落るなら栗と解てもい、大「支那の天子だ、圭「オイ來たり支那の天子と
 かけて、大「澁ッ柿ト解く心は氣(木)になるばかりッ、圭「生捕の清兵大「生
 捕りの支那兵とかけて、圭「紅葉を植ゑならべて横に竹を通して繩で結へ
 る、咳「お手數のかゝる事だ、圭「夫を庭の周圍へグルリと堀の様にしたの
 を表から見て譽めると解く、外「ヤレ、日ひの短みじかい時は掛かけられない程ほどの
 長ながい謎なぞだナ、圭「心はい、耻はぢ搔かき(檻垣)だ三人ハ、……大「よし、長なが
 い謎なぞなら此方こちらも遣やるぞエ、と斯かうだ陸軍へ從軍をして渡つた新聞社の特

派員が夏服で都合がわるいから仁川まで引返して冬服の附くのを待ち受
 け夫から出直してまた行くと一同平壤から歸つて來ると途中に川があつ
 て渡れなかつたさうだが其傍に支那人の打れたのが伏し重なつて山をな
 して居るので此奴は丁度い、都合だト早速其奴を持って來て辨髪を繋ぎ合
 せ見る間に一條の人橋を架けて川の上をドシ、渡つて仁川へ着たと云
 ふが、圭「イヤ、夫な事は無い筈だ、大「イヤサ夫が謎だヨ、圭「ナニ謎か
 イヤ是は篋棒に又長い謎だ、大「是を高架鐵道ト解く、圭「其處で心は大「死
 骸(市街)の上を記者(氣車)が通る。何と妙か、外「何の妙なものか。
 僕のも長いぞ。日本の軍艦が凱旋の途中黃海に於て俄にニヨキ、どわ
 られた者が有るのでハテ海坊主にしては小さいが何だらうとよく見

ると支那人が澤山あらはれ雇はれ賃を四百呉れ〜ト云ふ故ハ、ア分捕の旗を澤山立て來たので支那の船だと思つて死だ水兵が出たのだナエ、面倒なト空砲一發フツと言て消えて仕舞たが是が日本の軍艦だから宜つたが若し外の船であらうものなら直に沈められて仕舞ふかも知なかつたトかけて 圭「またか長いナ 外」是を知盛の亡魂と解く 圭「心は 外」支那幽霊ツ 大ム、ツ夫ぢやア落し話だ 圭「落し噺の短いのを一つ行う」李鴻章の護衛をする親兵は頻りに物忌ひをして箸が轉んでも凶とか吉とか理をつけて氣にしてばかり居さうだ「其護衛兵擔ぎと云ふから」丁汝昌は黃海の戦にまご〜して居るうち一發の爆烈彈が肩に當つて片腕がポロリと取れたとサ「初手から腕の無い男だ」

「秦の世に阿房を盡した長い城の邊まで最う攻め込ださうですから遠からず其邊もみんな占領して仕舞で御坐いませうヨ」「イヤ夫は長城

「支那の捕虜がぞろ〜來たのを見てヤレ〜馬鹿な奴だ碌々軍もしないうちから降参の旗を出すとハエ、弱いナアト云と清兵が噓「白旗せう

「支那兵の生捕がぞろ〜新橋へ着たが折ふし雨天で人力車か馬車が分らんが桐油が掛つて居た「ハ、ア爾うか夫は捕虜(幌)だらう

「清國の或所を攻撃しまんまと首尾よく乗取跡で焼てる石や瓦を海の中へ投込ましたら音がしました「ハア何う云ふ音が「チイフウ

「支那の兵士は軍に出る時からア、女房が歸るまで居るかしらん命はわ

るかしらんと氣ばかり揉むとは扱もく呆れた「其筈サ名からして清兵と言ふから

「北京陥落の報知は最う直でせうが海から行くのでスカ「イ、ヤ九十九折を越て攻めるのだ「ハテ何山を「何處でもい山路で勝と極つて居る

「威海衛にクルップが澤山あるさうですが澤山あつても打ち人が役にたぬのだから行ませんナ「左様とも大砲あつてもだめサ

「支那の兵はど呆れた奴はない逃る時には命を大事にして肝心の鐵砲は棄て仕舞とサ「知れた事筒がないのを悦ぶのだ

咳拙の狂句といふのをお聞なせへ 圭「今度は川柳と來たナ、ドレく敗北と孔子も地下でのたまはく

駒をならべて王様をみやこ詰め

白旗の方がいまでは平家なり

この秋の南さん米が大不出來

浮ぶ瀬はなしました海で沈められ

まける度はがれる李爺は軍師拳

まけた支那分捕り物が市のやう

喇叭手の名譽世界へ鳴りひびき

黄な海で扱屁の様な支那の兵

くさい物へ蓋は豚の國の新ぶん

義には富む國ぞ貧家もする獻費

北京と折れた唐ものゝふるい品
弱虫がないて居るのは支那の秋

唐筆のふるいは直首が抜け

日本へ俘虜りあみのなかの魚

肩身の挟く肩書の多い 李爺

牙の山猪 武者も無て 負け

素車白馬たゞに満州のみならず

豚々拍子に支那兵をやぶるなり

昔「扱是から都々一三十三十六歌戦と云ふ各作を御覧なせへ 外「サア今度のは長いぞ

第一章 (上海の暗殺)

戀にうらみの夫よりにくい

鐘と云ふ名のしのびもの

評 小人短銃の丸を抱いて罪あり、上海ホテルの彌生の夢に蝶とやならん金氏のうたゝ寐のひまを窺ひ彼して洪鐘宇と豫て巧みしピストルの玉も瓦と共に碎くる一發の砲聲は遙に東學黨を起しめ野邊の百千鳥囀づりの聲騒がしく花に嵐の物凄さ空合となりしも此鐘の無常を告る響きと聞えし

第二章 (刺客の立身)

金をなくして歸つた鐘宇が

にしま着るとは妙なもの

評 閔氏一族の擅横酷だしく名ある花をちらせし風をも愛る殺風景、
刺客洪鐘宇に高官を授與て國の亂れを省みず、あられ浮べる雲の上に
富を得ん事のうれしさに我のみの春ぞと思ふ鐘宇のこゝろの淺猿し
さ。果せるかな榮枯得失忽地に地を替へて昨日の意氣揚々と歸りし尸
さへ今日は浮世の秋に遭ふてまた來ん春の定めがたなき身とぞ成ける

第三章 (八道の梟屍)

さらす金氏のなきがらよりも

曲つた政治のはぢさらし

評 生前花合せにまで巧みなりし金玉均氏も彌生の下浣の花とちりて
別れくの首と胴、無惨の及に死屍を寸断されつ、花札の空素にあら
で此さらし物には見る眼不樂しく、誰かは此處置を宜しいと云ふ者あ
らん。然ば手役を扼して出をかける時を待ちたる東學黨の面々四方よ
り通し花を引てかゝり我こそ吟味を取んと轟く、是ぞ大合戦の端緒な
る

第四章 (東徒の蜂起)

東學とうからねらつた時節

こゝが思案の極めどころ

評 下水腐れて蚊を生じ上流濁りて一揆子牙の如くに湧く、韓國の東學黨金氏の暗殺より益々激して四方より起り立ち慶尙忠清平安の諸道^{がくだらきんし あんさつ ますくげき ほうよりおこりたち けいしようちうせいへいあん しょたう}を切り隨がへ勢ひ破竹の如し。朝船と云ふ船も此東鰐と云ふ鰐の爲めに吐嗟波間に沈まんとするの一刹那、助け船くを呼ぶ、此時唐船の來るあり、計らざりき又大荒とならんとは。

第五章 (清國の出兵)

支那に依ては約束わすれ

慾にひかるゝ義理しらす

評 天津條約の舌も乾かぬに慾に渴きて朝鮮の難を救ひつゝ恩に着せて八道を我物になさんと抜目なき李鴻章の目算、當事と越中犢鼻褌海一つ向ふから外れる後の禍ひをしらぬが佛顔して兵士を牙山より繰り込ませたるこそ心得ね。東徒の旗次第に影を止め東海の旭の旗是より光輝を四百餘州に放たんとす。

第六章 (世凱の周旋)

これも何ぞの袁せいがいと

親切めかした喰せもの

評 開た口に牡丹餅は棚にあり運天津、條約も何のそのうまく行けば我一人の大手柄と國の古狸に通知して一つ穴の貉閔族を化さんとせしも一人打つ碁にあらねば遂に山手を通りかねて我國の公明正大なる定石に押し潰され這ふくの体にて逃手を打ち夫より死だの生たのと岡目八目の世評鬻々



第七章 (公使の渡韓)

鶏の林に群れるるすゞめ

ちらす大きな鳥のこゑ

評 唐土の鳥が渡るとも朝鮮黃鳥囀るとも燕雀いかで大鵬に當らん、大鳥公使八重山號に搭じて直に入韓、全國政府の請求をも拒絶して一は清に對つて詰問する處わり一は韓に對つて請ふ處あり妖雲深うして言聞れず止む事を得ずして最終の手段を用ゐんとす、時しも文月二十三日初秋乍ら空のさまたゞならざりき

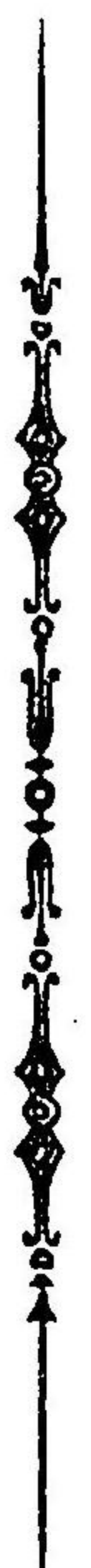


第八章 (城内の砲聲)

春を迎ふる門とは言へど

花をちらした小せり合ひ

評 大鳥公使の入城を妨げんとする許多の兵光化、彰化、迎春の諸門にて我兵に無体の砲發なせしかば最早韓兵罷りならぬ朝鮮安穩には通られぬと此方もすかさず打ち合ふ小銃の丸より小さな膽を持ちたる亂暴者束の間に逃げ去りて何處も道は開けぬ、此小戦に韓兵の即死十八九名負傷六十餘名と聞えし



第九章 (烟中入輿)

蘭を得意の大院君も

國の亂にはもてあます

評 京城の迷霧ハ廿三日の砲聲に破られんとす、筒の烟りも人のこゝろも未だ晴れ渡らぬに國王よりの急使あり大院君の輿は雲峴宮を離れ大鳥公使の言茲に容れられて政權は閔の手より大院君の掌中へ移り變りし韓廷の改革や、歩を進めんとしたる時しも更衣の頃今日の秋風は閔族の身に吹き來れり



第十章 (閔族の黜罰)

肩で切たるさのふとかはり

今日は身にこむ秋のかせ

評 大閔小閔お好み次第に店を張し閔族も今日は年明の空ピンと成り
て洋燈の毀れと共に價值無く、名物の虎よりも猛かりし苛政を事とし
たる者共遂にお拂ひ箱を背負はせられしは惡の報る、閔泳駿、閔定植、
閔應植、閔致兼、金世基等片ツ端より嶋流しを申し渡されし心地よき。
我國の義心を清國の虎狼心に比べなば其差幾何ぞ

第十一章 (民亂の鎮靜)

夫と見る間に消え行く花火

初めの音には引きかへて

評 一寸の破裂から耳を驚かせしも旗を揚花火と見しは夢の間にて仕
掛のなき集り勢次第に消えて影を隠したれど残る筒音出ては返らぬ清
兵の渡韓よりして雲井のさま物凄く日にたゞならぬ空合と變じ今にも
彈丸の雨降り注ぐかと各國の眼は此處に寄りぬ。清國斷じて螳螂の斧
を揮ひ我國遂に蹶然と起つ

第十二章 (豊島の海戦)

尻に帆かけて逃ゆく弱さ

初手から敗北支那のふね

評 時は七月廿五日の朝まだき牙山近き沖にて我軍艦三隻清國の軍艦に行き逢ひしに彼は急ち砲門を開きて我艦を砲撃したり、我は些も猶豫はす直に進んで接戦し操江號を捕獲し濟遠號廣乙號を走らせ運送船を打ち沈めたる。是ぞ我軍劈頭第一の大勝利にして二千足ずの清兵は波間の塵となり果つ其他の死傷多かりき

第十三章 (其二)

蟹に化たは平家の武者よ

蛸になるやら支那の兵

評 此時龍宮の巡海夜叉急ぎ龍宮城へ馳せ戻り「御注進く」「何事じや」「然ん候ふ只今牙山の沖にて俄に豚尾兵がぞろぞろ降参りました」「左様か宜い」蛸に致すから「夫は行舟まい頭に尾のある章魚は魚河岸でも恐らく買ひ舟まいと心得升る」「ナニよいワ」棄て置け、豚尾だこなら春になると尾が附て捌けるワイ

第十四章 (其三)

海のいくさの開けはこゝに

花を添へたるよし野艦

評 浪華艦の今を春べと咲くや此花、花ぐしき功名、秋津洲艦の野
分よりはげしき働らさ、中よ立て進退も吉野艦が濟遠號に當りし眼覺
しさ、潮の花を散して是はくどばかり敵を驚かせたる。敷島の大和
心を人間ば朝日に匂ふ山櫻花國の爲めには一命を散すも惜からずと思
ひ極めし四千万の人心此一捷報より愈奮へり

第十五章 (其四)

不意にやられた濟遠なぞ

支那の水夫のへらず口

評 我から戦ひをししかけたる清遠號は僅々の間に機關室を撃ち破られ
是では手も足も機關どうろついて居るうち操江する間も無く操江號は
分捕れた故ヤレ大變命あつての物種用意の白旗を掲げて助けて下チヤ
イニースト泣き叫ぶ折から少しの隙を得たれば逃ろくどの號令と共
に後白浪を蹴立てやつと逃げ延ひホツと一息

第十六章 (其五)

やけに成たか毀れた舟を

灰にして行くまけいくさ

評 廣乙號は濟遠と並びて少焉砲戦せしが逆も敵はぬ命の瀬戸うつかりすると徳利の假聲怖ヤ〜と一生懸命仁川近海まで遁れしかど船体痛み所甚だしく、毀れた船のお醫者様は日本の吉原にありと聞ゆ夫は敵國然も遠方船頭多くも山へは上げられぬ、いつそ焦り焼て仕舞へト火を掛けて乗組の兵士の陸に上り「先やつと助かつた

第十七章 (我軍の接戦)

牙と云ふ山眼がけてすゝむ

此處が軍のくちびらさ

評 成觀牙山の敵兵を片ツ端から揉み潰さんと我陸軍は隊伍整々行くく毫も犯す事無く素砂場に露營を張りて勇氣を養ひ壯なる人肥たる馬安城渡に向ふたり、水艸多き處より中空の雁を驚かしてあらはれ出たる敵の斥候殊勝にも撃ち拂はんとしたれど何かは以て堪る可き岸邊の露の間に烟りと消て敗走せしとなん

第十八章 (大尉の戦死)

可惜男松のふと枝折れて

こゝろ淋しい野分あと

評 安城渡の川浪荒れて血汐の紅葉太刀風に散り行く戦ひ最中、一陣の風松崎大尉を黄なる泉に誘ひこそ悲しけれ、此日の大尉の働き眼覺しなんど云ふばかり無く一人眞ッ先に進みて敵を切る事瓜を切るが如し。眞ッ先松崎讀聲通へばとて彼世へ眞ッ先には思はぬものを。然とも香しき君が名は鶴の千歳の後迄残らめ

第十九章 (成觀の朝霧)

のほる朝日の御旗の先へ

霧と消えゆく山の敵

評 文月廿九日の東雲かけて成觀驛へ押し寄る右翼左翼の我勇兵敵の幕營を一擧に攻め潰さんとして砲聲天地を動す、三時ならざるに敵兵は豚尾を巻きて牙山の方へ我もくと逃げ走り大砲小銃の置き土産お負ふ芥子坊主の生首を景物に添へてあり、難なく我軍の成觀の幕營に入れ替りて息をも吻ず牙山に進める勇しさ

第二十章 (牙山の占領)

首と捕虜分捕りものゝ

嵩は牙山も何のその

評 牙山に居たちやんく 妨主成觀の砲聲を聞くが否や孰れも震へ上り「何うだく最う逃やうぢヤア無へか幾度逃てもいゝ様に注進さへすれば却て褒美が貰へるからト一人が云へば二人三人「爾うともく逃て譽られる國は外に無い實に我清國程難有い國は無いヨ「お負に勝ば猶譽められるト云ひながら我先にと落て帷幕の裡の唐

第廿一章 (觀迎の綠門)

のぼる朝日の御旗を先に

はれて凱歌をうたふ兵

評 戦争の口明けに牙と云ふ山を抜き分捕生捕も山程にて意氣揚々と京城へ引き揚る勇しさ大鳥公使は綠門のもとに待ち受けられ在韓の人々觀迎の旗眞ツ先に押し立て龍の雲を得たる勢ほひなり砲聲のひやく處陸軍の名譽共に海外に轟く此凱旋門やがては日本東京に建られ市民軍隊を迎ふる日も遠からずア、ゑらい門だナア

第廿二章 (凱旋の宴會)

松もこの日は凱歌をうたふ

君が千歳をいはふ祝宴

評 万歳の聲沸くが如く人の龜に似て酒を汲むに忙し大鳥公使の演説
大嶋少將の答辭についで朝鮮外務辨金嘉鎮の謝辭あり時は八月六日
の夜倭城の月日章旗と等しく光輝を天が下に放ち南に南山を仰ぎ北
王城を睨む酒は泉をなして肉は林も斯くやらん衆皆歡を盡して散ず。
喝采の聲に秋風寂として聲なし

第廿三章 (分捕の運送)

はこび切れぬ分捕りものを

馬も勇んで乗せて行く

評 此時馬が足りないので何にしやうと云ふ相談になると或人が「い
つそ捕虜の背に乗て辨髪を手綱代りに引張り敗くドウくト引で行
くなどは至極便利であらうト云ふ説を出したが行はれなかつたと云ふ
話。是はナル程いゝ考へで支那人は馬と格別違つた事はないだらう殊
の外豆が好きだと云ふ事だから

第廿四章 (操江の轉籍)

敵の分捕りそはから使ふ

つよい日本の將基さし

評 支那と日本を將基の手合せと見れば飛車角二枚落ちはまたな事歩
三兵でも譯のない弱蟲。支那の將基の弱い事と云たらお話にならぬ譯
で王様は取れやうが夫な事は構はぬ何でも金銀が欲しいと云ふ位眼の
見ぬぬ奴が揃つて居るのだからいづれ北京の都詰めならずはズツと先
の雪隠詰めになつて埒の明くは知た事

第廿五章 (平壤の攻撃)

平氣の平壤氣樂に守り

衆をたのみに支那の兵

評 またもよき事を菊月に我軍隊は平壤の城を攻め落し清國の蛆蟲共
を燃り漬して吳んと大嶋立見の二少將勇士猛卒雲の如く押して行き速
くも大同江附近の敵をさんくに薙ぎちらして明なば牡丹臺を落花微
塵になさんづ意氣込み折節清將は官妓に鼻毛をのばして明日の命と知
ず月を觀ての酒宴とは呆れた事だ

第廿六章 (其二)

盛り久しく防ける筈が

散てはかなき牡丹臺

評 小西攝津守行長は此處でさんく味噌をつけ家來を田樂刺しにされて耻を後世に残したれど今の世の野津中將は二十日は扱置き一時のうち牡丹臺を打ち破り勇氣獅子の狂ふが如く眼に餘る大軍を一揉に追ひ崩して城内の一隊に白旗を掲げさせたは大したお手柄定めし十萬億土で藥屋さんが大黃を嘗た様な貌をして面目を失つて居るだらう

第廿七章 (其二)

寶喜に御苦勞お茶でもあがれ

わざく出て来て敗軍

評 三面合撃の鋒先するどく苦もなく平壤の大掃除をやらかした處ヒヨコリと飛び出したのは左寶喜と云ふ艸箒にも劣た大將にてエ、面倒など繩からげにして城内の納屋へ投り込れしとの事此男が珍しい事は下駄を穿て居たさうでスヨ處が全地の人民が寶喜生捕と聞くよりイヨ難有いと悦んで直に我軍門へ参り「お願ひで御坐い升此奴はまこと

にハヤ亂暴な奴で今日まで城下の者をいぢめ升事實にお話になりませ
 ん爾ら云ふ次第で御坐い升から恐れ入り升が全人を我々へ下し賜はら
 ば幸ひと願つたが我軍で許さない。處で夫では仕方が無いからせめて
 彼奴の穿物でも眞ツ二つにして遣れト寄てたかつて下駄を滅茶く。
 是がソレ寶喜が憎けりや下駄迄と云のでせう

第廿八章 (其四)

不意の嵐に色さめわたる

秋の野山のからにしき

第廿九章 (其五)

君にいのちをさしけし銃の

先をあらそふ大和たま

評 平壤の門まで攻め寄せたる處我軍の一卒一命を堵して躍り入り難
 なく城門を八文字に開きたりとは實に羨ましい功名手柄いづれ立派な
 勳章が胸に光つて天晴故郷へ錦をかざるであらうと思はれ升が兵士さ
 へ此通り況して將校のお腕前恐れ入たものサ勇將のもとに弱卒無し
 とか此事をや云ふならん

第三十章 (其六)

耻は白茶のをんなの衣服

冠つて逃ゆく芥子坊主

評 十万だの百万だのと法螺ばかり大きくても其膽の小さき事は姜維の面汚しとや言ふ可き。平壤が落るが否や妻君の手紙も官妓もなつちも入ないサツサ置いてケ逃げてケ。てけれツつのバア〜トステ、コを踊る様な身振りをして逃げる清兵と云たら丸で芝居の打ち出しの様であつたト立見少將の隊より報知(でも何でもな)

第卅一章 (清國の危急)

陸ぢや追れる海ではしづむ

支那ぎやむまいこの苦勞

評 黒死病の流行したのが前表で遂には清國が難病にかゝり李鴻章なと云ふ鑛醫者の匙加減では何うして〜日一日にむづかしい容体。よく〜考へて見ると清國の讀聲は死國に通ひ支那の死ぬと聞えるのは争はれるもの其處で李鴻章も近々改名をすると云ふ話は實説なり。何と改名するかと覺し召す……………李降將

第卅二章 (黄海の海戦)

よせばよかつた命をとられ

あとで黄海しづむふね

評 勝て兜の緒を締め我軍はますます堅固なるに支那は負つゝいても
兜の恐びの緒を切る様な死武者が無く負れば負る程弱くなつて李鴻章
が一枚づゝ剥れると云ふのが落なり。處で平壤の凱歌の聲まだ消ぬら
ち大孤山沖にて我軍艦は敵の海軍と衝突し奮撃突戦三隻を粉に砕いた
が其粉を煎じて弱蟲に吞せて遣り度ゲスヨ。オホン

第卅三章 (海軍の名譽)

國を思ふて乗り組む人の

こゝろなりけり赤城艦

評 赤城。比叡。西京。の三艦列外にありて一以て百に當る。赤城艦
長坂元氏は奮戦して名譽の死を遂げ。樺山中將は西京丸に在りて指揮
を傳へ。水雷艇の中を乗り切て敵艦を走らせた其強さ。就中赤城艦
長の忠死誰か悼まざる者あらん死しても譽れある名は黄海に残りてい
たづらに黄泉に沈みし清國とは雲泥の差なり

第卅四章 (陸海の捷報)

運はさたまる天ちやう節に

もろく落ちたる奉天府

評 緒の玉のほうてん府も一まるめに取て腰に附け筒をかたげて呼
吸をもつかず金唐皮や面の皮唐人を片ツ端から首捻ぢ切り慈姑の根附
けは何でぞんすト紐を通して本國へ贈り物。いざ歸國と云ふ時は勳章
の金物に功名手柄をかゝやかせ四百餘州を一度ならず二度も三度も踏
みわらし三遍廻つて烟艸入を取出すこそ愉快なれ

第卅五章 (毎戸の國旗)

旗をお出しと子供のしらせ

またも勝かど氣が勇む

評 信濃には田毎の月とて聞えし名所あり我國の日毎の旭として地球
上の名所としたきは馬に鴨綠江に飲ふ我軍隊より平壤につゞきて奉天
府扱は威海衛天津の上陸など愉快なる新聞號外出ると共に毎戸の國旗
大勝を祝して日本國中は旭日輝く日毎にのぼる旭の御旗各國の眠りを
さます空前絶後の大勝利

第卅六章 (北京の陥落)

おもひ通りに鳴る祝砲の

音に聞えしかちいくさ

評 素車白馬たゞに秦王子嬰のみあらん、秦を清とは遁れぬ音讀。支那皇帝軍門に降り、城下の盟ひ忽ちに成る。北京城に早晚我軍の聯隊旗ひるがへり暴清今日孤城落日。僅少に偏境一城の主となるを得、償金億万降卒百万。功成りて一先日本帝都の凱旋門に臨む。兵士の心歡迎する人の心何如ぞや、千代田城の松枝を鳴さぬ万歳の春。



主「謎から落し噺し都々逸と来た日に大いよく後の浪花節でもやらかすカネ主「イヤサ即席三題話しは何うだらう外「面黒し〜何様難題話しでも持て來給へ直にうまく落して見せる 大「古物を洗濯するので直に落ると云ふのぢやア無へか 主「落たの落無へのと奥山で吹矢の玉を覗ふ様だサア早く題を極るぞよし大「踏臺でも椽臺でも何でも來い外「米屋と酒屋の代と來たら困るだらう咳「コリヤア拙が出しやせうヨ外「ソラ又咳呵子が黄色な聲を出しはじめた 主「黄色な聲でも黄色な題でも早く出したり大「黄色な題とは所謂其味いひ放屁の如きものかしらん咳「八釜しい先大砲は如何大「大砲な題だ咳「海に口とは如何主「海に口は大砲カ外「餘り附き過た題だネ 主「斯う云ふのは何うだらう海に口は大砲ト云ふ題で

「旅順口よある大砲は澤山なものたさうだが
砲臺の長い事と云たら海へ一里程もズツと
出て居るとヨソリヤア口から出砲臺たらう

咳「此奴は出放題にしては出来た〜」大「サア難題を出すぞい〜か子。エ
と諸葛亮孔明の楠公。藁ト云ふ題だ圭「強宜にむづかしい外」サア謹聽
〜」のが出来たぜ

題 孔明 楠正成 藁

「清國もいよく孤城落日北京が危ふくなつ
たので何でも智恵袋を絞つてゑらい謀畧を
用ひたいト一同軍議に及ぶと孔明の末孫で

降参と云ふ男僕が風を祈るから諸君は軍艦
の上へウンと藁を乗て日本の軍艦へ火を放
ち給へト云ふに一同是は妙計と手を拍て賛
成し直に風を祈らせて見たが少しも吹ない
ので是では行ぬと再び相談するに今度は關
羽の子孫で頑愚と云ふ奴がのさばり出何う
で御座いませう敵國の正成と云ふ智者が度
々用ひた藁人形を一寸借用して敵の砲丸を
取るなとはイヤ先刻から承まはるに藁へ火
をつけるの藁で人形を拵へると夫では丸

で藁で合戦をする様だ。夫は知た事どうせ支那は藁軍(笑ひ草)になるに違ひないから

「イヤ是は又附會もくひと過る外夫では僕が出題するがよしかネ今度の錠に北京に敗走と云ふのだ。大待ヨ北京に敗走は附き過るが錠と云ふ題が妙だオツト出来たり

「度々の敗北に清國では臆病風ますく吹き募り北京の城を取れてはいよく王様は北京詰となる一件だから何でも此處は堅く守らうと云ふので國中の鍛冶屋を残らず呼び集め城の門へ一々大きな錠を附け是をピン

と下して置きさへすれば大丈夫急ぎ仕上る様にと達しると鍛冶屋連は天窗を搔き何うも澤山の錠を急に拵へるのはナトむづかしい事で御座い升が何うで御座いませういつその事門の扉を蠟附けになされてはト云ふに係りのナヤン坊主眉を擧め夫では火で焙ると直にとける理屈たワイヘイ夫でも何うせ取れる城でスから世話ならに少しのうち蠟錠(籠城)としてお置きなさい

外よし其題で一つ傑作を出さう、いゝかネ錠に北京に敗走と云ふ

のだせ咳「錠でも宜しい早く敗走外」何が敗走だ咳「拜聴と聞えやせう大」拜聴ども鼠入ずども聞えないナ外「東西

「北京の城が落ちて支那の軍勢が全く敗走したと聞より府下では何處も祝宴を張ると或人から勝利の祝ひとして大きな分捕り物を御覽に入ると言て一つの箱をよこしたから扱こそ金の塊りか乃至は銀塊か何にもせよ早速拜見と箱に手を掛けて見たがなか〜容易に開ない見ると長い錠がおろして有て此長錠を破つて御覽ト書て有るから一生懸命

に長錠を打ち毀し中を開て見たらから、
「古い〜外」古いか新らしひか其箱は大「サア〜退たり〜今度は此者の番だ先刻大分妙な變唄が出たが僕は葉唄見立を遣うと思ふ 外「御代診と来て下手なお見立を承まはるのも御難だ 大「處が格子先に立つ通人と云ふのでうまく見立たから妙だらう先本調子から聞玉へ

梅にも春は色添へて

將校と兵士

粹なうさ世を戀ゆるに

見る影もない洪鐘宇

羽織かくして袖ひき止て

支那兵の妻子

雪は巴に降りしる

征清の道中

宇治は茶所さまぐくに

我國民の義舉

葉唄見立

七十七

枯野ゆかしき隅田堤

我物とおもへば輕し

梅がぬしなら柳がわたし

更て逢ふ夜の氣苦勞は

淺くとも清きながれの杜若

金時がく熊をふまへて

淀のくるまは水故まはる

秋の夜はながい物とは

ひらさきの結びめ堅き縁の糸

鳥羽玉の闇とお前に昇り詰め

陷落後の平壤

寒を犯して北京に進む兵

海軍と陸軍

臆病清兵の夜中巡廻

國を思ふ渡韓の人夫

豚を懲す蜻蛉

新聞屋の多忙

翌日の城攻を待つ我勇卒

韓廷改革

仁風に靡く八道の草木

勝利の電報

一言が十言に向ふ嬉しさは
た前と一生くらすなら深山の奥のわび住居

支那の大將最う逃げ支度

大同江と平壤

敵國の法螺新聞

鍛錬の我兵

逃た葉志超

我軍隊の勇士猛卒

茫然と恭親王

北京を見て勇む我軍

紀伊國の音無し川の水上に

うろとまことの二瀬川

玉川の水にさらせし雪の肌

川竹に浮名をながす鳥さへも

和歌の浦には名所が御座る

蝙蝠が出て北濱の夕すいみ

めぐる日の春に近いとて

ひとつとして歸れば門の青柳に

支那新聞の振筆を讀だ隣には勝利の記事の有る新聞

夕暮にながめ見あかぬ

銀座通りにて我軍の大勝を祝ふ國旗

網は上意をかふむりて

敵を探る斥候

衣のわかれの空も雨誘ふ

清國の敗將と官妓

今朝の雨にしつばりと

敵兵の油断

書き送る文もしどなき

戦地の通信

仇な笑良につひ惚れこんで

女にのろい支那の軍人

朝良の露のいのちの果敢なさは

もろい敵兵

口舌して思はせぶりな

驕らす軍器

忍ぶ懸路は扱はかきさよ

欠落の支那兵

花のくもりか遠山の雲か花かは

海戦の砲烟

萩桔梗中に玉章しのばせて

従軍する記者

一聲の月がないたか時鳥

飛ぶ彈丸

起て見つ寝て見つ待ど

俘虜の留守宅

今鳴るはたしか上野か淺草か

號外勝利と呼ぶ

あれ見やしやんせ海晏寺まゝよ立田の高尾でも及びないぞへ紅葉狩

赤城艦長名譽の戦死

春雨に口説とぎれてたゞくよくと

籠城

お互ひに知ぬが花よ

臆病を隠す清國の將卒

天の戸の明ると言るうれしさに

奉天府陥落

草も寐しづひよもすがら

清兵逃出す相談

豫てより口説上手と知乍ら

野津君の腕前

駒止て袖うち拂ふ影もなき

追る、満州兵

あま辛氣くさゝに

李爺のやけ酒

一夜あぐれば又氣も變る

いぞ鎌倉と云ふ時になつて逃尻の支那兵共

矢矧の橋は長けれど

遠方でも北京は瞬く間

ほんに思へばきのふけふ

早いお手柄

いたこ出嶋の真菰の中で

金玉均

露は尾花と寐たど云ふ

負惜しみ丈は強い敵國

梅はさいたが櫻はまだかいな

奉天府に勝ば夫から夫と捷報を待國民

外是は譯なしださし代り合て二上り三下り何でも彼もで尻馬と出掛け

やう 圭何うかお手短に願ひ度 外承知く

そもや抑此富士の白酒と申すは

神代以來武事にくらからぬ我國

春雨にしつぱり濡る鶯の

御用商人大儲け

越後の國の角兵衛獅子國を出る時や親子づれ

今は一人の清國の俘虜

わしが國々で見せ度ものは

敵の俘虜を養なふ寛仁大度

夜の雨もしや來るかど

兵站部の用心

淀の川瀬の景色を此處に

九段の分捕品陳列

竹になりたやしちく竹

渡韓志願の壯士

うたひはやせや大黒

新橋へ續々着生捕と分捕

春の梅見て楽しましやんせ

征清戦争記

櫻見よとて名をつけて

軍費献金を名とする詐偽

摘やれお摘やれ宇治の里の茶摘

片ツ端から連戦連勝

外最一つお負けに古めかしくも子供だましのいろは短歌を見立ろく

犬も歩けば棒にあたる

「清兵の斥候

論より證據

「勝たくと偽るども見よ分捕と俘虜

花より團子

「戦争は何うでもいゝ金が欲しいと云ふ支那兵

憎まれ者世に憚かる

「金を潰した鐘

骨折損のくたびれ儲け

「報るは靚面逃亡した刺客

尻を放て尻つぼめる

「負けたわとへくと清國の軍備

年寄りの冷水

「出馬した李鴻章

塵つもつて山

「貧家より献金の軍費

律義者の子澤山

「時事新報の長文電報

ぬす人のひる寐

「〇〇の〇艦

瑠璃も玻璃も照せば光る

「旭の餘光」

老ては子に隨がふ

「西太后の臍線り支出」

割れなべに閉ぢふた

「李鴻章と袁世凱」

かつたいの瘡うらみ

「流された閔族」

葭のすいから天井のぞく

「デモ通信者」

旅は道づれ

「二人づゝ辨髪をつながれた清兵」

良薬は口に苦し

「朝鮮に對する日本」

惣領の甚六

「大きいばかりで智慧のない豚」

月夜に釜をぬかれる

「牙山の敵兵」

念には念を入れ

「參謀の軍議」

泣き面蜂が刺す

「哥老會のごたく」

樂あれば苦あり

「從軍者の紀行」

無理が通れば道理引込む

「閔族世盛りの時分」

啞から出たまこと

「豫報が當つた新聞の記事」

芋の煮わたも御存じない

「啞の捷報を悦ぶチャン」

咽喉元すざれば暑を忘れる

「偽東學黨」

鬼に鐵棒

「人の和を得てすゝむ我勇兵」

臭いものに蓋

「敗報を隠す支那官吏」

安物買ひの錢失なひ

「清艦で雇つた外人」

まけるが勝

「支那人のへらす口」

藝が身をたすける

「洋服屋にパン屋

文は遣たし書手いもたず

「支那兵の愚痴

子は三界の首枷

「穀つぶしの弱蟲ぞろい

得手に帆をわけ

「連戦連勝の威はひ

亭主の好きな赤烏帽子

「孫子を持ち出す敵の参謀

天窓かくして尻かくさず

「支那の軍器

三遍まはつて煙草にしよ

「凱歌をうたふ日兵

聞て極樂見て地獄

「新聞屋の内幕

油断大敵

「オヤ九連城オヤ奉天ト北京の狼狽

眼の上のたん癩

「佛に睨まれる清國

身から出た錆

「病院入りのハンチツケン

しらぬが佛

「清國のズツと奥の人民

縁は異なるもの

「黒死病のあとで國死

貧乏ひま無し

「〇〇の心配

門前の小僧ならばぬ經を讀む

「人夫にも剛の者あり

背に腹はかべられぬ

「近いうち償金を出して閉口する支那

粹が身を喰ふ

「散財する新聞社

京の夢大坂のゆめ

「廣島行き夜の夜汽車

「見立が初まつた日には此方も何ぞ見立やうかしらん 咳「餘まり見立つ
くめも感心しやせんから拙は問答と行きやせう 大「ハ、ア問答は面白ど

うだせ併し誰が答へる 外僕が答へるから何でも問ひを發したり 圭爾
ら来るなら問ひをかけるぞ 大東西此所滑稽出たらめ問答初まりく

問「支那兵の服は背中が大層奇麗なれど其割に前の格好がわるい様な
のは如何

答「いつも背中を見せるから其時の外形のいゝ様に背部を成可く奇麗
にするのだ

問「大清は愚の如しと云ふは真か

答「利口性と云れても相手が上手と來ては馬鹿になる

問「キラ星の様に兵が有ても負るとは支那も何うしたのだらう

答「星が惣出でも旭が出れば消る道理

問「支那兵の俘虜は不潔だとい何うした譯

答「獨身者が多いから皆無妻サ

問「合戦をして和兵とは如何

答「油揚もさらはぬに豚尾と云ふが如し

問「清兵はいつも軍器を棄て逃るさうだが外に手輕な軍器でも持て居
るのかしらん

答「口に鐵砲もあればばん槍と云ふ槍を持て居る

問「弱虫くど云ふが其様虫ばかりでは何うなるものか知ん

答「北京が今に野原になる

問「佛國と日本國どに惱まされるは何ぞ定まつた約束事でもあつてか

答「定まつた事もないが支那の昔から儒者の國であるから神と佛とに攻められるも縁りあらん

問「清國の兵士は弱いと一口に言ふばかりで無く實にハヤ呆れたもので九連城でも鳳凰城でもつまり我兵の顔さへ見ればドシ〜逃る

のだから早く言へば入れ代ると云ふ位なものだ是にお説が有うか
答「當り前の事だ、清國の兵士は金の爲めに出るのだから乃はち雇ひ

人ソラ雇ひ人だから出代りの積りかも知れぬ

問「昔は強い人も居たさうだが今の弱さは何う云ふ次第

答「相場が下落したから昔の支那とは支那が違ふ

問「滿州兵は賊ばかり働らくと云ふ話だが賊の系統でも有るものにや

答「みんな泥棒なれど滿州の騎兵に付ては秘藏の名説あり、其譯は饅

頭の兵だのに白馬を用ゐると云ふを見れば泥棒上戸なるは當り前

と云ふ可し

問「鷹や鳩の祥瑞が有る譯は

答「大鳥が渡つてから軍が初まり海陸に鳥の瑞あり海も鳥陸も鳥向ふ

處を鳥と云ふ吉兆に極つて居るはなしで御座る

外「何と奇妙か〜」大「巧遅拙速マア何も言ふまい評する丈問答だ 咳、夫

がお洒落とは問答に情なうゲス 圭「オット洒落と云へば少しばかり駄洒

落を闘はせやうサア早いところを言ッただぜ 外「よし來た僕から題を出

さう。朝鮮ッ 大「朝鮮の燈火トハ如何 咳、朝鮮ぢや満足ぢやトハ何うで

ゲス都て洒落の斯う有り度ゲス目下朝鮮政府は我國の厚意に感じて 主
 「オイ〜 咳呵子講釋は抜きにして貰ひ度洒落だか理屈だか分らない大
 「支那なら幾何でも出来るぞ。支那より團子。支那の財布に五十兩 外五
 十兩と言て貰ひたい 大「支那から牡丹餅。支那を取て眼へつける。支那
 が有たら支那へ行て支那めぐりをして支那に乗て支那中を支那歩いて支
 那の奴等を支那殺しにして支那ツて支那へ積で支那川へ歸りたい。ア、
 苦しい 圭「呆れ返らア塲末の道具屋ぢやア有るめへしくだらない支那
 ばかりを並べて居る 外「凱旋で一行行 大「凱旋の大小柱曆イヤ此
 奴の樂だ。凱旋に猪口。凱旋世界 外「凱旋の〜とて暮にけり。何と名
 句だらう 大「何の人の種を拾つて 咳「凱旋様へ願かけてツ 圭「今後は凱

歌だ 大「凱歌のりう〜仕上げを御覽じろ 外「サア最ふ外に凱歌〜
 大「凱歌北京の惚仕舞 圭「最う此處らで惚仕舞が宜らう 咳「此次は冠り附
 を一つ行きやせう 大「結構

ぶら〜と

提灯さげて支那の兵士

ころ〜と

尾のある首がいくさ跡

ろろ〜と

弱い豚尾が半風子はど

ずる〜と

尾を引ずつて豚はしり

つる〜と

一番乗りの はら田氏

くる〜と

清艦しづむあどのなみ

ばら〜と

北京へおつる砲丸の雨

ものは

ひらくと

勝利をいふ市街の旗

九十六

やすくと

先手よ入りし四百州

がらくと

日々にくるまで戦利品

「主色のものはを一つやらかさう」大「だんぐ」甘くなつて来る奴サ子

白いものは

支那で出す旗ト我兵士の心

赤いものは

海戦後の潮ト清兵の袖口

黒いものは

我兵士の服と敵將のはら

青いものは

大同江の水ト人夫の服

黄赤いものは

軍用のビスケット

白く赤いものは

勝利を祝する日本の国旗

青く赤いものは

敗北ときいた支那人の顔色

外「ア、餘りくだらないので退屈して来た陽氣なものを願ひ度ものだネ」大「其事サ三下りや見立は有たが葉唄が餘り出ないから陽氣と云ふ御注文に付て極愉快なのを一つ出さう」主「サア御順にく」

○羽織かくして

「屠り盡して首引きからけ斯うでも法螺は吹んすかト云つ」勝て談じ込む兵士北京に詰めかけてアレ見やしやんせ此勇氣。

○むつとして

「どつと来て入れば支那の空城にのこりし砲

葉唄

九十七

丸を行く先でまたこめて打つ首尾のよさ。あれば日ごとの勝いくさ

○起きて見つ

入りて見つ出て見つ勝るためし無く傍の弱さに李爺一人氣を揉むたより氣味がよくたんと苦勞をさつしやんせ

○露は尾花

支那は勝利を得たと云ふ負けたはつひに無いと云ふアレ得たと云ふ得ぬと云ふ駄法螺が世に出てわらはれた

○棚の達摩

「あまり景氣宜さに裏の酒屋さんをちよいと口説き勝沙汰聞つ」ツイ五の字飲で見たり

(是は日本勝利と聞き國民の悦び)

「あまり景氣悪さに棚の關羽をそつとおろし八拜やつたり」お怨み申して見たり

(是は清兵敗走と聞き豚尾の心配)

外「サア大騒ぎに活惚れ」マコレサ「鐵瓶を叩いちやア困る茶碗も土瓶もコウ片附てト。サア何とでも巫山戯玉へ

「沖の廣いのに烟りが見ゆる。あれは我ものヤレ

コレコレソノサ

威海衛山の黒いのに大砲が見える。

あれは聞えし旅順口塹の白いのに市街が見える。あれは眼指せし北京城。

「餘さず切り取れく漏さず討ち取れく」降

参ぢや屬國ぢや支那は最期の弓折れて白旗

をかよけてベタ負た逃けた奴等は影も無い

主活惚れと來たから最う附會もこらでお開きにして老松で御祝儀を

つけて今日は千秋樂としやせう三贊成く

「そもく支那に勝たる沙汰萬國に聞え我帝國の威はひ存分のひかりを放ち古今も例を

見ず先度渡航の六月の兵日々次第に勝つゞ

け大分盛りになりしかばいかで敵を崩さん

と北京のかたへ押しかゝる此城忽ち大まけ

となり使者を立身をおとしてその國を渡し

たりしかば以後は屬國といふ沙汰をおくり

下し給ひてより支那を日本と申すとかや斯

様にうれしき勝鬨のきこゆるばかり祝ひに

は旗をかよけて御威光は龜の萬代日の本の

榮え久しき大慶至極。どうくドツと御國の

老松

勝と定まる報知こそ目出度けれ

四人万歳々々先戦争は是でれ仕舞ッ

百二



征清と もろこし談話終

全 明治二十七年十一月六日印刷
年 全月 十日發行

著作者 長井總太郎
東京市麹町區有樂町三丁目一番地

發行者 太刀川吉次郎
東京市京橋區北橫町十二番地

印刷者 野村宗十郎
東京市京橋區築地二丁目二十番地

印刷所 東京樂地活版製造所
東京市京橋區築地二丁目十七番地

發兌 鳳林館
東京市京橋區北橫町十二番地

版權所有

賣捌所

日本橋區通三丁目
 淺草區三好町
 日本橋區本石町二丁目
 神田表神保町
 日本橋區通油町
 京橋區彌左衛門町
 全區桶町
 全區南傳馬町
 京橋區南紺屋町
 日本橋區馬喰町
 日本橋區元大坂町

金櫻川屋堂
 大田屋堂
 上京堂
 東岡屋堂
 藤岡屋堂
 巖々堂
 梅原支店
 目黒支店
 薰志堂
 山崎屋
 小林喜右衛門
 佐勘書店
 水琴堂
 文正堂

其他全國各書店

鳳林館近刻書目

大石正巳 法學士柴田泰之助君校閱
 法學士中村竹藏君校閱

日英新條約義解

城新君纂註
 壹冊定價金三十五錢
 郵稅金四錢

佩弦齋主人新著

平壤の凱歌

定價金八錢
 郵稅金貳錢

西森骨皮道人新著

清兵退治の歌

定價金八錢
 郵稅金貳錢

平壤陷落激戰額面畫

密畫彩色入橫額
定價金三十錢
郵稅金貳錢

日韓清對話自在

旅裝懷中用本
壹冊定價金八錢
郵稅金貳錢

朝鮮國王同王妃殿下及大院君ノ肖像

石版金彩色入
一枚定價拾錢

發賣元

東京京橋區
北橋町拾貳番地

鳳林館

